

「教育心理学概論」授業公開について

会 沢 信 彦

(教育学部准教授)

1 科目名、公開日時、教室、対象

- (1) 授業名 教育心理学概論
- (2) 公開日時 2008 年 12 月 5 日 (金) 1 時限
- (3) 教室 1 3 2 0 2 教室
- (4) 対象 教育学部心理教育課程 1 年生 (必修) 104 名 + 2 年生 (再履修) 2 名
計 106 名

2 科目全体のねらいと内容

本科目は、心理教育課程 1 年生を対象とした必修の専門科目であり、幼稚園および小学校の課程認定を受けた教職科目ともなっている。

科目設置の本来の趣旨は、文字通り、教育心理学の全般にわたって概論的な内容を講義することなのであろうが、筆者は実際には、「学習」「動機づけ」「パーソナリティ」「教育評価」の領域を中心に扱った。なお、教育心理学の重要領域の 1 つとされる「発達」については、学生たちは 1 年次春学期に「乳幼児の発達心理学」を履修していることから、割愛している。

参考までに、各回の主なトピックは以下の通りである。

<第 1 回>

- * オリエンテーション
- * グループ分け① (後述)
- * グループワーク (後述)
 - ① 簡単な自己紹介
 - ② 秋学期の抱負

<第 2 回>

1 教育心理学とは

- (1) 教育心理学の定義
- (2) 教育心理学の研究法

<第3回>

2 学習

(1) 学習とは

<第4回>

2 学習

(2) 連合論①

* レスポンデント条件づけ、オペラント条件づけのメカニズム

<第5回>

2 学習

(2) 連合論②

* レスポンデント条件づけ、オペラント条件づけの応用

<第6回>

* グループ分け②（後述）

2 学習

(3) 認知論

(4) 社会的学習理論

<第7回>

2 学習

(5) 学習から「学び」へ

3 動機づけ

(1) 外発的動機づけと内発的動機づけ

<第8回>

3 動機づけ

(2) 動機づけの諸理論

<第9回>

3 動機づけ

(3) 原因帰属

(4) 達成動機

<第10回>（本時）

3 動機づけ

(5) 遂行目標と達成目標

(6) 学習性無気力

(7) 動機づけに関する研究論文紹介

<第 11 回>

＊ グループ分け③（後述）

4 パーソナリティー

(1) パーソナリティーとは

(2) 類型論①

＊ 血液型と性格

<第 12 回>

4 パーソナリティー

(3) 類型論②

＊ クレッチマーの類型論とユングのタイプ論

(4) 特性論

<第 13 回>

4 パーソナリティー

(5) 精神分析のパーソナリティー理論

(6) パーソナリティーの形成

(7) パーソナリティーの理解

<第 14 回>

5 教育評価

(1) 教育評価の歴史

(2) 教育評価の目的

(3) 教育評価の方法

(4) 教育評価の技法

3 公開された授業の流れ、ねらい、内容

(1) 本時の流れ

まず、本時の流れを時系列的に示す。(なお、時間については記憶を頼りにしているので実際とは多少のずれがあるかもしれないことをご承知おきいただきたい。)

① 8:59 教員入室

② 9:00 出席カードおよびプリント配布

③ 9:03 挨拶（「では始めます。いつものようにみんなで挨拶しましょう」などと声をかけてから、午前中であれば「おはようございます」、午後であれば「こんにちは」と、まず筆者が挨拶する。続いて学生が唱和するのだが、ここで学生から元気の良い挨拶が帰ってくるとやはり気分がよい。)

- ④ 9:03 グループワーク：前回の授業から今日までに起こった印象的な出来事を語る（後述）
- ⑤ 9:08 グループワーク：前回の復習（後述）
- ⑥ 9:10 前回の出席カード紹介（後述）
- ⑦ 9:15 本時の授業内容開始
- ⑧ 10:25 本時の授業内容終了、出席カード記入
- ⑨ 10:30 授業終了

(2) 本時のねらいと内容

当日は、「動機づけ」の最後の部分を扱った。

「動機づけ」の全体を通して、将来教育や保育の現場で活かすことのできる、動機づけに関する教育心理学の主要な研究成果を伝えることをねらいとしている。言うまでもなく、この講義を通して、学生には児童・幼児を適切に動機づけることのできる教育者・保育者になってほしいという願いからである。さらに、下記④においては、教育心理学の研究の一端を紹介することを狙いとした。

本時の授業内容（上記(1)⑦）については、以下のような流れで行った。

- ① 配付資料Aを参考に、「遂行目標」と「学習目標」の概念について説明した。
- ② 配付資料Bを参考に、「学習性無気力」の概念について説明した。
- ③ 「学習性無気力の身近な例」について、グループで話し合わせた。
- ④ 配付資料Cをもとに、動機づけに関する最新の研究を紹介した。

なお、配付資料Aは、中澤潤（編）『よくわかる教育心理学』（ミネルヴァ書房、2008年）の44・45ページ「学習目標：やる気を支える目標」のコピー、配付資料Bは、同書40・41ページ「学習された無力感：自分でできるという気持ちの大切さ」のコピーである。それぞれ出典を明記した上で授業開始時に配布した。また、配付資料Cは、『教育心理学研究』第56巻2号（2008年6月）に掲載された論文、安藤史高・布施光代・小平英志「授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響」（pp.160-170）のコピーを授業途中に配布した。

なお、配付資料AおよびBについては、付録として掲載する。

4 参観のポイント・授業についての自評

筆者（会沢）の実践上の工夫と課題について以下に述べる。

(1) グループ学習の導入

大学授業におけるグループ活動の導入については、既に数多くの実践が報告されているところである。特に、グループ活動を活かした大学授業について体系的に実践と

研究を積み重ねているのが、協同学習である（例えば、Johnson, Johnson & Smith, 1991；杉江・関田・安永・三宅, 2004）。

Johnson, Johnson & Smith (1991) によれば、協同学習には以下の5つの基本要素が必要であるという。

- ① 互恵的な相互依存関係の構築
- ② 対面的で促進的な相互交流の保障
- ③ 個人のアカウンタビリティーの確立
- ④ 社会的技能の育成と活用
- ⑤ 協同活動評価の実施

さらに、これらの要素を満たした協同学習の成果に関する数多くの研究が行われているが、それらは3つのカテゴリーに大別できるという。

- ① 達成への取り組み（努力）
- ② 協調的な人間関係
- ③ 心理面の健康

筆者も協同学習に若干の関心を抱き、ワークショップや学会（日本協同教育学会 <http://jasce.jp/>）に参加したりはしていたものの、これまで特別に協同学習による実践は行ってこなかった。しかし、2008年度秋学期は、思い切って本科目と「学校カウンセリング」（3年次対象教職科目、4クラスを担当）の計5科目で、協同学習を意識した、グループ活動を取り入れた実践を行ってみた。なお、筆者の実践は上記の協同学習の5要素を満たしてはいないため、協同学習とイコールではないことを付記しておく。

具体的には、以下のような授業形態である。

- ① 教員によるグループ分け

教員が4人（一部5人）のグループ（第1次グループ）を編成し、グループごとの座席を指定した上で、1回目から5回目までの授業を行った。グループ分けに当たっては、児童心理教育コースと幼児心理教育コースの学生が混ざるように配慮した。6回目から10回目までは、同様の条件でメンバーが異なるよう編成した第2次グループで授業を行った。11回目から14回目までは、同様の条件でメンバーが異なるよう編成した第3次グループで授業を行った。つまり、この授業全体を通して、学生は3つのグループに所属することとなった。

- ② 授業冒頭でのグループワーク

出席カードの配布または点呼による出席確認の後、授業の冒頭で以下のグループワークを行った。

1) 前回の授業から今日までに起こった印象的な出来事を話す

学生同士が交流を深めることを目的に「前回の授業から今日までに起こった印象的な出来事を話す」という活動を行う。具体的には、グループの学生にじゃんけんをさせ、勝った人から時計回りで話すこととしている。時間は全体で3分半ほど取っている。最初の頃は「1人30秒程度で」と指示しているが、時間管理は学生に任せている。したがって、時間内に全員が話し終えていないグループがかなりあるものと思われるが、特に介入は行っていない。

2) 前回の授業の復習

1)の終了後、グループで前回の授業の復習を行わせる。1)とは異なり流れについて筆者から指示することは特にしていない。時間についても、その時の学生の様子を見て、1分から2分程度と幅を持たせている。

③ 授業内容に関するグループワーク

授業内に1、2回程度、授業内容に関して意見交換をする時間を設けている。テーマは、できるだけ学生にとって身近に感じられるであろうものを提示している。本時においては、「学習性無気力」を取り上げた後、「学習性無気力で説明できる身近な具体例」をテーマに話し合わせた。

テーマによって話し合いが盛り上がる時とそうでない時とがあるが、このテーマはどちらかというと後者のようであった。たった今教わったばかりの概念を現実場面に当てはめると急に言われても、我々でも困ってしまうであろう。やはり、大学1年生にとっては少し難しかったかもしれない。

(2) 出席カードの活用

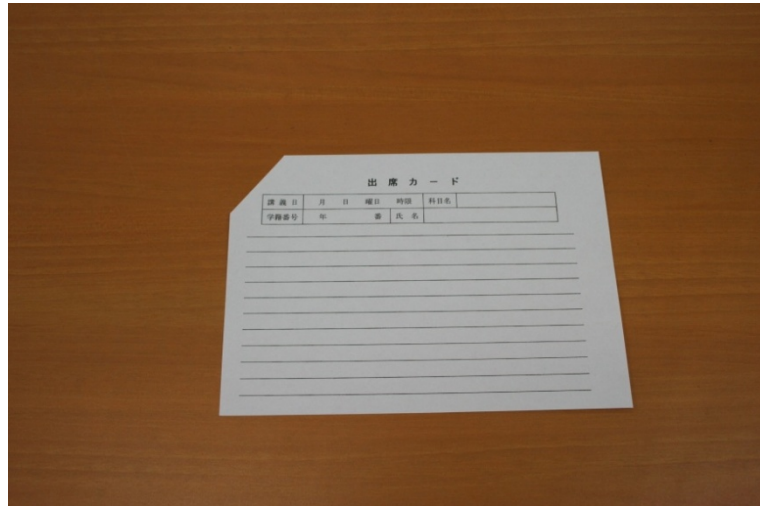
(3) 配布

原則としてすべての講義系科目で毎回「出席カード」を配布する。本授業のように受講者が多い大規模授業については、出席確認にも用いている。(出席確認の方法については後述する。)

写真のように、整理の便宜を図るために左上端をカットしたB6判の用紙の上部に授業日・時限、科目名、学年・学籍番号、氏名を書く欄があり、その下に10行分の罫線が引かれている。

大規模授業においては、授業開始のチャイムが鳴り終わるとともに、筆者が受講生一人ひとりに(午前の授業であれば)「おはようございます」と声をかけながら出席カードを手渡しする。小・中規模授業においては、出席カード記入の時間(後述)の直前に前から後ろへ送る形で配布していたが、「事前に配布してほしい」という要望が出されたため、5回目ぐらいの授業から大規模授業と同様授業のはじめに配布すること

としたはずであった。「はずであった」と言うのは、配布を忘れて結局元のように出席カード記入時直前に配布することが多かったからである。



出席カード

(4) 記入

授業終了前の5分程度を出席カード記入の時間としている。本授業であれば、10時25分頃、「今日の授業の感想、意見、質問、コメントなどを5行以上お書きください」と指示を行う。

なお、書き終わった者から解散とはしていない。7、8割の学生が書き終わった頃か、終業チャイムの直前に解散としている。

① 次回授業時における紹介

提出された出席カードは、次回の授業までに目を通すようにしている。そして、次回の授業で紹介するものを3名程度分ピックアップする。選ぶ基準は、比較的書いてある分量が多く、何らかの点でユニークな意見や感想が書かれたものである。

次回の授業では、グループワークで「前回の復習」を行った後、選んだ前回の出席カードを紹介する。内容を匿名で読み上げるとともに、筆者の視点で何らかのコメントを行う。

(5) 出席確認

筆者は「出席重視」を標榜している。したがって、出席確認は毎回行っている。

受講者50人程度までの小・中規模授業では、チャイムが鳴り終わるとともに、挨拶を行う。その後、受講者名簿を見ながらフルネームで名前を呼ぶ。学生には、「手を高く挙げて返事をする」ことを求めている。一通り呼び終わると、「いなかった人をも

う一回呼びます」と言って返事のなかった学生の名前を再度呼ぶ。公平を期すために、二度目の点呼が終わるまでに入室すれば出席としている。それ以降の入室は遅刻としている。

受講者 50 人程度以上の大規模授業では、原則として点呼はせず、出席カードの提出を持って出席としている。遅刻して最初に配布した出席カードを受け取っていない学生には、出席カード記入時に、遅刻の「チ」とサインをしたカードを手渡す。このカードを出した学生は遅刻扱いとしている。なお、本科目においては、4 回だけ点呼による出席確認を行った。

なお、遅刻 3 回に付き欠席 1 回としている。

(6) 時間厳守

筆者が授業行うに当たってもっとも重視しているのは、時間厳守である。

まず、授業開始時は、極力チャイムよりも前に教室に入室するようにしている。現在のところ、1 時限目および 3 時限目の授業についてはチャイム前入室の達成率は 8 割程度であろうか。1 時限目も授業のある 2 時限目については、達成率 5 割程度ではないかと思われる。

終了時刻については、前述の通り、① 7、8 割の学生が書き終わった頃か、② 終業チャイムの直前に解散としている。学生の立場を考慮し、どんなに遅くともチャイムと同時に終わるようにしている。

(7) 板書

近年、FD が義務化されたことにも伴い、多くの大学教員が自身の授業の改善に向けてさまざまな工夫を凝らしているのは周知の通りである。最近は特にプレゼンテーション用ソフト（パワーポイント）を用いた授業が増えているように感じられる。そのような中で、もはや板書などというものは古式騒然たる教育方法であって、工夫のうちには入らないのかもしれない。しかし、筆者は依然として板書中心の授業を行っており、またそれを大変気に入っている。

パワーポイントは、今や学会発表などでは欠かせないツールとなっている。短時間に多くの情報を視覚に訴える形で提示できるからである。筆者も、学会での発表やシンポジウム、一部の講演などでは大いに重宝している。一方で筆者は、1 回限りの学会発表や講演と授業とはまったく性格を異にするものだとも考えている。

筆者は、板書のメリットは「間」だと思っている。板書しながら授業をすることで、「間」が生まれる。筆者にとっては、授業を進めていく上で、この「間」がちょうど良いように感じられる。確かに、板書を用いるとその分進度が遅くなり、情報量も限られる。しかし、1 回限りの学会発表や講演と異なり、十数回にわたって行われる授

業においては、多くの情報を提示するよりも、適度な「間」があることで、学生の思考が促進されるのではないかと考えている。



第 14 回授業終了時の板書

参考までに、本時ではないが、第 14 回目授業終了時の板書を写真で示す。

(8) 課題——グループ学習を中心に

本来であれば、参観者の率直な感想やコメントからこそ、本授業の課題が浮かび上がってくるはずである。しかし、残念ながら参観者がなかったので、筆者自身が実践の中で感じている課題として、グループ学習に関する諸課題を問題提起するにとどめたい。

① 授業の冒頭に行う 2 つのグループワーク（出来事、前回の復習）を、ほぼ毎回 10 分弱程度の時間を割いて行った。貴重な授業時間を割いて行うだけの意義が果たしてあるのかどうか、検討に値するものと思われる。

② グループ学習については今年度初めて導入したため、授業内容に関するグループワークについては、必ずしも計画的に行われたものでないことを告白せざるを得ない。今後もグループ学習を継続するのであれば、グループワークに関するしっかりとした授業計画が必要であることは言うまでもあるまい。

③ 授業アンケートの自由記述欄にグループ学習についての感想や意見を求めたところ、「知らない学生と仲良くなれて良かった」「他の学生の意見が聞けて視野が広がった」などという肯定的な意見が多かったのは事実である。しかし、果たしてこの授業形態が学生にどのような影響を及ぼすのかについては、比較的長い時間をかけて検証

することが求められるように思われる。

5 授業公開についての感想、意見

各教員わずか1、2時間であったとは言え、6人もの教員が自身の授業を公開したことは、本学、少なくとも越谷キャンパスのFD活動にとっての小さな一歩となったことは間違いあるまい。結果として参観者がきわめて少数であったというのは残念ではあったが、初めての試みであり、さまざまな条件整備が不十分であったことを考えると、致し方ないことと考えられよう。

おそらく他の著者も指摘していることと思われるが、今回の結果を失敗ととらえるのではなく、次の一歩を歩み出すための具体的な方策を考えることが、今求められているように思われる。そして、わずかずつではあってもこの歩みを前進させることが、学生に対する教育サービスの向上へと連なり、ひいては大学の社会的評価を高めることにも結びつくと思われたい。

<引用文献>

- Johnson,D.W., Johnson,R.T. & Smith,K.A.(1991). *Active Learning: Cooperation in the College Classroom*. Edina,MN : Interaction Book Company. (関田一彦 (監訳) (2001). 学生参加型の大学授業 玉川大学出版部)
- 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ (編) (2004). 大学授業を活性化する方法 玉川大学出版部